

【前赤壁賦（ぜんせきへきのふ）】

① 月夜に舟を浮かべる

壬戌の年、秋七月の満月を少し過ぎたころ。蘇軾は友人たちと舟に乗り、赤壁の下を遊覧した。そよそよと涼しい風が吹いている。川面には波一つ立っていない。

蘇軾は酒を取り出して友人たちに勧め、

月を詠んだ詩を口ずさみ、「窈窕（ようちよう）」という一節を歌った。

しばらくすると、月が東の山の上から昇ってきた。

月は斗宿・牛宿という星々のあたりをゆっくりと進んでいる。

白い露が川一面に広がり、月に照らされた水面は、そのまま空まで続いているように見える。

小さな舟を思うままに進ませ、広大な川面を漂っていると、

まるで何もない空中を風に乗って進んでいるようで、どこへ行くのかも分からない。

この世の俗事から離れて、ひとり自由になったような気持ちだった。

まるで仙人になって空へ昇っていくようだった。

② 酒を飲み、歌う

そのうち酒がすっかり楽しくなり、蘇軾は舟べりを叩きながら歌った。

「桂の木で作った櫂、蘭の香りのする櫂で、

月の光に輝く水面をかき分けて進もう。

私の思いは遙か遠くに広がっている。

あの愛しい人を、遠い彼方に思いながら……」

すると、友人の一人が横笛を吹き、その歌に合わせた。

その笛の音は、恨んでいるようでもあり、慕っているようでもある。

泣いているようでもあり、訴えているようでもある。

その余韻は細い糸のよういつまでも消えない。

深い谷に潜む龍さえ踊らせ、ひとり舟に乗る寡婦さえ泣かせるような、もの悲しい音だった。

蘇軾は急に表情を曇らせ、襟を正して座り直した。

そして友人に尋ねた。

「どうしてそんなに悲しい笛の音を吹くのだ？」

③ 友人が曹操の話をする

友人は答えた。

『月が明るく星はまばら、鳥が南へ飛んでいく』。

これは曹操の詩ではありませんか？ここから西を見れば夏口、東を見れば武昌。山や川が幾重にも連なり、深い緑に包まれている。

ここは、かつて曹操が周瑜に敗れた場所ではありませんか。

あの曹操が荊州を破り、江陵を下り、川を下って東へ進んだときには、軍船が何千里にも連なり、旗が空を覆った。

酒を川に注ぎ、長い槍を横たえて詩を詠んだ。まさに天下一の英雄だった。

それなのに、その曹操は今どこにいますのしょう？

まして、私たちは今、川辺で魚を捕ったり薪を拾ったりしながら暮らし、魚やエビを友とし、鹿を仲間としている。

一枚の葉のような小舟に乗り、ひょうたんの杯で酒を酌み交わしているだけです。

私たちの命は、天地の間に浮かぶカゲロウのように短い。

広い大海から見れば、私たちなど一粒の米のように小さい。

自分の人生があまりにも短いことを悲しみ、果てしなく続く長江をうらやましく思う。できることなら仙人と一緒に空を飛び、明るい月を抱いて永遠に生きたい。

しかし、そんなことは到底できない。だから、この悲しい笛の音に思いを託しているのです。」

④ 蘇軾が考え方を変える

そこで蘇軾は言った。

「君は、あの水と月のことをよく考えたことがあるか？川の水は、絶えず流れている。

しかし、流れていくように見えても、川そのものがなくなったわけではない。

月も満ちたり欠けたりする。

しかし、それによって月そのものが永遠に減ったり増えたりするわけではない。

つまり、変化するものだけを見れば、世の中のすべては一瞬のうちに変化している。

けれども、変わらないものという視点から見れば、天地も私たちも、すべて尽きることがない。

そう考えるなら、どうして長江をうらやむ必要があるだろうか。

そもそも、この天地の中にあるものには、それぞれ持ち主がある。

だから、自分のものではないものなら、ほんのわずかなものでも取ってはいけない。

でも、川の上を吹き抜ける清らかな風と、山の間に浮かぶ明るい月だけは違う。耳で聞けば美しい音になり、目で見れば美しい景色になる。誰もそれを独占することはできないし、いくら楽しんでもなくなることはない。これは天地自然が私たちに与えてくれた、尽きることのない宝なのだ。そして、それは私たちが一緒に楽しんでよいものなのだ。」

⑤ 夜が明ける

友人はその話を聞いて喜び、笑った。

二人は酒杯を洗って、もう一度酒を酌み交わした。

食べ物も酒もすっかりなくなり、舟の中は杯や皿が散らばった。

二人は舟の中で寄り添うようにして眠った。

そして、東の空が白み始めたことにも気づかなかった。

【後赤壁賦（こうせきへきのふ）】

① 十月、もう一度赤壁へ

その年の十月、満月のころ。蘇軾は雪堂から歩いて、住んでいた臨皋へ帰ろうとしていた。

二人の友人も一緒だった。黄泥坂を通りかかると、霜や露が降り、木の葉はすっかり落ちていた。地面には自分たちの影が映り、見上げれば明るい月が出ている。

その美しい景色を見て、三人は楽しくなり、歩きながら歌い合った。

やがて蘇軾は言った。

「友人はいるのに酒がない。酒はあっても肴がない。

こんなに月が明るく、風が清らかな夜なのに、どうやって過ごしたらいいのだろう。」

すると友人が言った。

「今日の夕方、網を投げたら魚が一匹獲れました。口が大きく、鱗が細かくて、松江鱸魚（しょうこうすずき）※のような魚です。魚はあるけれど、いったいどこから酒を手に入れましょう?」

そこで蘇軾は家に帰って妻に相談した。すると妻は、

「酒なら一斗ありますよ。あなたが急に必要になるときのために、ずっと取っておいたのです」と言った。

そこで三人は酒と魚を持って、もう一度赤壁へ向かった。

※松江鱸魚（しょうこうすずき）

上海の近郊にある松江のスズキのこと。中国のスズキは古来よりの珍味であるが、スズキ科の魚とは全く違う褐色をした魚で、日本ではカジカ科に属するヤマノカミと呼ばれる魚である。その形相がいかめしいので、「山の神」と名がついている。

② 前とはまったく違う赤壁

川は音を立てて流れている。切り立った岸は千尺もあるように見える。

山は高く、月は小さく見える。水が引いたため、これまで水の下に隠れていた岩が姿を現している。ほんの少し前に来たばかりなのに、

「以前とはまるで違う景色ではないか」と蘇軾は思った。

そこで蘇軾は衣の裾をたくし上げ、岩場を登っていった。

険しい岩を踏み、草むらをかき分け、虎や豹がいるような険しい場所に腰を下ろし、龍が登るような岩場を登る。

さらに、鳥が巢を作る危険な場所までよじ登り、下を見れば、水神・馮夷が住んでいるという深い水底まで見えるようだった。二人の友人は、そこまでついてくることができなかった。

蘇軾が突然、長い声をあげて叫ぶと、草木が震え、山が鳴り、谷がこだまし、風が起こり、川の水が湧き上がった。蘇軾自身も、ひっそりと悲しくなった。

そして、ぞっとするような恐ろしさを感じた。

「ここに長く留まることはできない」そう思って、舟へ戻った。

そして川の真ん中へ舟を出し、舟が流れていくままに身を任せ、そこで休んだ。

③ 夜中、白い鶴が現れる

夜もそろそろ真夜中になった。あたりを見回しても、ただ静寂が広がっている。

そのとき、一羽の鶴が、川を横切って東から飛んできた。

翼は車輪のように大きく、黒い羽と白い羽をまとうている。

そして、「カアーツ」と長く鳴きながら、蘇軾の舟の上をかすめて、西へ飛び去っていった。しばらくすると友人たちは帰り、蘇軾も眠りについた。

④ 鶴が道士になる夢

蘇軾は夢を見た。羽衣を着た一人の道士が、ひらひらと衣をなびかせながら、臨臯の下を通りかかった。道士は蘇軾に挨拶して、「赤壁の舟遊びは楽しかったですか？」と尋ねた。

蘇軾は、「あなたは誰ですか？」と聞いた。しかし、道士はうつむいたまま答えなかった。蘇軾はしばらく考えた。そして、はっと気づいた。

「そうか……分かったぞ。昨夜、私の舟の上を飛びながら鳴いていた鶴は、あなたではなかったのか？」すると道士は振り返って笑った。

そこで蘇軾は驚いて目を覚ました。戸を開けて外を見た。しかし、そこにはもう道士の姿はなかった